

研究会(第1回)の主な論点

項目	主な論点
基本的な方向について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 過保護でない行政への転換が鍵。食品流通においても同じ方向を目指すべき。 ・ 各国では競争のルール作りが置かれているが、競争を進める場合、その結果が壊れたシステムは不可逆的であることに留意が必要。 ・ 流通機構が複雑だと、コストがかかる、流通時間が長くなるため保存料の使用可能性が高まる、表示のすり替えが行われやすくなる等の問題があるので、流通機構の簡素化を進めるべき。
食品流通の特性について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作業単位毎の効率化ではなく、フードシステムでのトータルな効率性やパートナーシップのあり方を考えるべき。 ・ 消費者ニーズと生産供給構造のミスマッチが起きないよう、総合的なシステムとしての視点が必要。 ・ 消費の形が、素材から惣菜へ、弁当へ、さらには宅配へと変わるし、野菜の原形のままではなく、加工流通中心になる。 ・ 日本の流通の原点の見てくれ販売から、脱皮が必要。
項目	主な論点
食の安全・安心について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食の安全・安心の確保が重要な課題。一方で低価格も追求しており、それを実現できる流通が重要。 ・ 生産者主権から生活者主権へ、供給から消費へ軸足を移すことを確実に実行することが重要。 ・ 食の安心・安全について、消費者指向と実需者志向がマッチしていないのではないか。 ・ 食品添加物等について、科学的合理的な根拠があるならば、海外で認められているものは日本でも認められるよう、規制のハーモナイゼーションが必要。 ・ 食の安全・安心のためにはトレーサビリティが必要であり、認証や内部・外部の監査システムが必要。
卸売市場流通について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 卸売市場の効率化は、企業論理だけでは考えられず、利益追求と公共性との境界をどこに置くべきかをよく考える必要。 ・ 卸、仲卸、小売が、卸売市場に共同の情報やモノの集散拠点を相互利用により、全体のコストは下がる。 ・ 仲卸の領域が狭まっているのは、卸売市場が変化に対応できていないためだ。
食品小売業について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食品専門小売店は、競争で店を閉めてしまう、後継者がいない、経営資源、特に人材等の問題があり、最も困難な時期。 ・ 専門小売店の減少は、高齢者にとっては利便性が低下。 ・ 専門小売店の育成・活性化を考える分科会を設置して議論してはどうか。
項目	主な論点
効率化について	<ul style="list-style-type: none"> ・ ITによるコスト削減は、過渡期にはマイナス面もあり、規模の小さいところには指導が必要。 ・ 情報化は、電子取引、スーパー自社流通、広域物流センター、卸売市場利用等の対応を分けて考えるべき。 ・ 青果物のコストについては、段ボールをコンテナに変えること、また、規格を簡素化して選別調製に要する時間を減らすことが必要。
物流・品質管理について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本のスーパーでは温度管理が完結していない。(日本の場合は2、3日で変化するが、米国では1週間持つように、品質の差もある。) ・ 日本の小売店はフロントヤードがよくてバックヤードが悪く、米欧はその逆。店舗が整備されていく順序が逆。
研究会の進め方について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農協の今後のあり方や市場の構造的な問題を掘り下げて考えるべき。 ・ 専門的な立場から議論をする場が必要。 ・ 委員に生産者代表が2名と少ない。 ・ 何を議論するのか、何にまとめるか、絞って議論する必要(安全性、自給率、輸入野菜、野菜加工といった大きい問題まで議論するのか)。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中国、韓国は、東京へ送るのに国内の産地からよりも安く入ってくる中で、流通の多様化、体系化と、日本の食をどうするか視点が重要。 ・ 農協は、農産物の販売事業、マーケティングを考えていなかった。